

芸術系大学のキャリアについて —文献調査とイギリスの事例から—

Occupations and Career of Arts Graduate
— Literature Review and Case Study of U.K. —

松崎 久美 MATSUZAKI, Kumi

1. はじめに

先進国の大学の中で、最も入るのが難しいと言われて注目を浴びているミネルバ大学。その創始者である Ben Nelson 氏は、高等教育に革命を起こすため 2012 年にミネルバ・プロジェクトを設立し、2014 年にミネルバ大学を開設した。そのカリキュラムはユニークで、学生はキャンパスに来て、教員の授業を聞き高度な数式等を解くのではなく、実践的な内容で批判的思考や問題解決などの応用力 (transferrable) を身につけることを目的としている。「リベラルアーツ教育とは、学生が自由に、批判的に、論理的に考えることを教えるはずだ。しかし、私たちのエリート大学では、もはやそのような教育が全く行われていない」という Nelson 氏の考えを反映している。日本では同時期に、文部科学省による人文社会科学系学部の不要論と思われる発表が話題になっており、世界のトップリーダーを育成する姿勢とは真逆の動きをしていた。また近年、世界で話題のビジネス書は「芸術」「音楽」「美術」「教養」「クリエイティブ」「アート思考」「デザイン」「コミュニケーション」など、人文社会科学系学問と関連の深いワードが入ったものが多く出版されており、日本でも翻訳されベストセラーとなっている。しかし、日本の労働マーケットでは、そうしたワードが入った学問は就職に不向きで、ビジネスとはかけ離れえたものと捉えられがちである。確かに産業界では、人工知能 (AI) などの技術革新が注目を浴びている。一方で、全てが AI で解決するのではなく「新しい技術を使っていく側」の人材も必要となっている。労働市場では、人生 100 年時代や労働力不足などにより、単線型のキャリアではなく様々な職の経験、複数の仕事、リカレント教育など、働き方の変化が予想される。2020 年世界中を襲った COVID-19 は、人々の生活、学び方、働き方に影響を与え、変化の少なかった日常に対し、予測不可能な時代を柔軟に対応し生き抜くことの重要性を現していた。まさに、人文社会科学系の学問が育成する「問い」への探究能力は、新しいアイデアを産み出し、こうした時代に必要とされている能力だと認識されていくべきであろう。

人文社会科学系の学問領域に関して、2020 年 9 月イギリスのガーディアン紙が以下のように取り上げている。「芸術、人文、社会科学 (Arts, Humanities, Social Science, 以下 AHSS) の学位取得者は、経済の急成長分野 10 分野のうち 8 分野に就職する確率が、STEM (Science, Technology, Engineering and Mathematics の頭文字で科学・技術・工学・数学の教育分野を総称する語、以下 STEM) の卒業生よりも高くなっている。全体的に見て、

STEMの卒業生は、AHSSの卒業生に比べて、卒業後1年以内にどのような仕事にも就くことができるという点で、わずか1%ポイントのアドバンテージを持っているだけだ」(The Guardian, 2020)。その記事は、英国学士院ⁱが2020年5月に発表した報告書「Qualified for the Future: quantifying demand for arts, humanities and social science skills」ⁱⁱの調査結果に基づいている。本報告書は、AHSSの学生が大学教育を通じて得たスキルが社会と経済に与える影響を現在と未来を軸に、またSTEMの卒業生と比較したものだ。その結果、芸術、人文、社会科学で培われたスキルが、現在だけでなく将来にわたって、英国の労働力、経済、社会に具体的な利益をもたらす、という証拠を示している(The British Academy, 2020)。日本でも、『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)』では、高等教育が目指すべき姿として『「何を学び、身につけることができたのか」を中軸に据えた多様性と柔軟性を持った高等教育への転換』が掲げられ、学修者が大学教育を通じて身に付けたことを社会に対し説明できるような教育課程であることが求められている(文部科学省、2018)が、人文社会科学系学問に対する批判的な態度を覆すような具体的な証拠を挙げるに至っていない。

社会の変化と求められる教育と人材像、それに人文社会科学系学問に対する捉え方は、話題にのぼることは多いが、十分に調査され分析されていないように思われる。そこで、学びと獲得できるスキルを明確に説明することができる芸術系大学の教育課程と人材育成の関連性について現状を把握し、社会に共有することにより、そこにある課題と未来に向けた教育について語ることはできないのだろうか。そこで、芸術系を学ぶ学生が取得する技術や能力と就職の関連性について現状を把握し、芸術系学部の魅力を大学関係者が再認識し社会に発信する可能性を探る。

2. 目的

本稿は、芸術系学部における就職とキャリア形成について、これまで議論されてきた先行研究の特色と、イギリスで行われた人文社会科学系学生(AHSS)のキャリアに関するレポートと比較し、共通点と課題を整理して今後の芸術系大学のキャリア形成支援のあり方及び研究の方向性について検討する。芸術系学部には、大きく分けると美術系、デザイン系、音楽系の学問に分かれ、それぞれ異なる学び、スキル、キャリアが考えられるが、今回は芸術系学部の概要を得るために、これらをまとめて「芸術系」ⁱⁱⁱとして取り扱うこととする。

芸術系学部・専攻の学生の卒業後の就職率を見ると、その他の人文社会科学系分野の学生の就職率に比べて低く(喜始, 2014)60%前後で推移している。一方進学率は、人文系

i 「The British Academy」の日本語訳。人文社会科学振興のための組織。

ii 「未来への資格：芸術、人文科学、社会科学のスキルに対する需要の定量測定に関する研究」(筆者訳)。

のほぼ倍、社会科学系に比べると4倍程度高く、大学全体の平均値を若干下回る高い進学率である。

表1 R2年3月卒業者 専攻別卒業後の進学、就職率

	進学率	就職率
全 体	10.4%	77.7%
人 文 学	4.1%	82.4%
社会科学	2.2%	86.7%
芸 術	8.6%	64.5%

資料出所：学校基本調査より筆者作成

しかし、現在の日本の社会における「就職」は、専門的な技術を使用した業務に従事するものではなく、新規卒業者を一括採用し、社内で多様な業務を経験し、人材を育成していく「メンバーシップ型」雇用である。このような労働市場において、芸術を学び、専門分野に即した技術と知識を修得する芸術系学部の学生にとって、特定の企業に就労する「就職」を選択すること、あるいは「就職」をしないことが他専攻の学生と同じ意味を持つのだろうか。一方で、大学はキャリア教育が必須となり就職率を公表しなくてはならず、経済的に安定して自立するための「就職」に対する保護者の要求は高くなっている。「高校生と保護者の進路に関する意識調査2019」によると、進路選択の際に、約二人に一人の保護者は「将来の職業との関連」「就職の実績」を重要な情報だと考えている（リクルートマーケティング、2019）。

本稿では、芸術系学部の教育内容と就職という大学と社会の接続との関連に潜む現状を明らかにするために、学校基本調査と芸術系大学が発表する卒業後の進路・就職状況のデータから、芸術系大学の卒業後の現状について概観を得る。次に、先行研究から、キャリア教育と就職の特色について整理する。最後にイギリスの調査事例から、研究・調査概要の違いとキャリアの全体像を比較し、今後のキャリア教育の可能性、調査・研究の方法についてまとめるとともに、芸術系学部の魅力を大学関係者が再認識し社会に発信する可能性を探る。

3. 芸術系学生の卒業後の進路データの概要

3.1 方法

学校基本調査の「卒業後の状況調査」を利用し、芸術系学部と他の人文社会科学系の卒業生の進路状況の概観を過去5年に遡りまとめた。学校基本調査のデータでは、卒業生数に対する就職者から就職率を出している。「就職者」の内訳は、令和2年とそれ以前で異なっており、令和2年の「就職者」には、「自営業」、「無期雇用労働者」、「進学のうち就職しているもの」、「有期雇用労働者のうち雇用契約期間が一年以上かつフルタイム勤務相当の

者」が含まれている。それ以前は、「正規の職員等（進学者のうち正規の職員等の者を含む）」のみを「就職者」としている。「その他」の内訳は、令和2年は「臨時労働者」「1ヶ月以上の有期雇用労働者から「就職者」にカウント分を差し引いた者」「臨時労働者」「左記以外の者」をまとめている。令和1年以前は「正規の職員等でない者」「一時的な仕事に就いた者」「左記以外の者」とした。また、芸術系学部の中でも美術、デザイン、音楽の専攻別の特徴を捉えるため、同学校基本調査の令和2年と令和1年のデータから、専攻別に詳細にした進路先とともに抜粋した。

各大学が発表するデータは、就職状況を理解するためではなく、どのような進路状況を大学が重要とし、社会や将来の学生に伝えようと考えているかを把握するために、ウェブサイト等に公表されている進路のカテゴリーを抽出した。対象大学は、「芸術」「美術」「音楽」のいずれかが大学名称につく公立大学2校、私立大学4校とした。理由は、芸術系大学の専攻分野は大きく分けて「音楽」「美術」「デザイン」に分けられ、大学の名称には「芸術」「音楽」「美術」と挙げているケースが多い。「音楽」の中には、伝統的な楽器演奏や作曲の他、テクノロジーと音楽が結びついたものやダンスなどのパフォーマンスが含まれることもある。「美術」には、絵画、工芸、デザインなどのコースがあり、芸術として鑑賞を楽しむものから、人の生活に関わる物とバラエティに飛んでいる。音楽系、美術系どちらにも、純粋な芸術と社会や日常生活に関連し企業への就職に結びつきやすい分野があり、多様な特徴を持つ。芸術大学生の進路と大学の意図を幅広く読み取るために、大学名称から分野を広げ全体像を概観することを目的とした。

3.2 学校基本調査のデータから見る進路の状況

本データの就職率は、学校基本調査の「卒業者に占める就職者の割合」を算出しているため、「就職希望者に占める就職者」から割り出している大学が発表しているデータより低い。R2の就職率が過去のデータより若干高いのは、有期雇用のうち1年以上の契約期間でフルタイム相当の者を就職者にカウントしていて、H28からR1までは就職者のうち「正規の職員等でないもの」の項目は雇用形態、期間が曖昧なため、就職にカウントしていないからと考える。

表2からは、全体及び人文社会科学系と比較して、芸術系は明らかに就職率が低い数字で推移している。一方で、人文社会科学系に比べて進学率は倍以上である。進学率が若干下がりつつあるが、その理由は保護者の要請や大学のキャリア教育等により就職が推奨されてきた可能性があるがこの傾向については、もう少し経年変化を見る必要がある。

表2 卒業者に対する就職者、進学者、その他の割合

	全体	R2	R1	H30	H29	H28
卒業生全体	就職者数	77.7%	76.2%	73.2%	72.9%	71.3%
	進学者数	10.4%	10.7%	10.8%	11.0%	11.0%
	その他	8.6%	11.0%	11.5%	12.6%	14.0%
芸術系	就職者数	64.5%	59.1%	57.0%	53.2%	50.3%
	進学者数	8.6%	8.5%	9.3%	9.5%	9.6%
	その他	22.3%	27.5%	28.6%	31.7%	33.6%
人文文学系	就職者数	82.4%	79.7%	78.3%	76.4%	73.9%
	進学者数	4.1%	4.1%	4.4%	4.6%	4.7%
	その他	11.5%	14.1%	15.0%	16.5%	18.6%
社会科学系	就職者数	86.7%	85.8%	85.0%	83.7%	82.0%
	進学者数	2.2%	2.3%	2.3%	2.5%	2.5%
	その他	9.3%	9.9%	10.6%	11.5%	12.9%

進学理由には理系の学生が研究の継続及び研究場所の確保をする事と同様に、制作・演奏活動を継続するためにはその活動場所の確保が必要である。特に授業料が低い国公立の芸術系大学における進学率は高かった。

次に、専攻別卒業生数に対する進路の内訳をR2、R1のデータより算出した（表3、表4）。この2年間で数字の大きな変化はないが、専攻別の特色が現れている。美術、音楽の進学率は卒業生全体の平均を上回り、デザインの進学率は他の人文社会科学系より若干高い程度である。デザイン系は、美術・音楽より企業で活躍する場が多い可能性を示唆している。

表3 R2.3月卒業者の進路内訳

	進学者	就職者	有期雇用	専修・外国 の学校等	左記以外	不明
美術	14.3%	55.5%	4.4%	1.3%	22.0%	2.5%
デザイン	3.8%	71.0%	3.3%	1.5%	18.2%	2.2%
音楽	15.6%	55.3%	4.8%	5.1%	17.1%	2.2%
その他	5.4%	69.4%	4.8%	1.9%	16.4%	2.0%

表4 R1.3月卒業者の進路内訳

	進学者	正規職員等 でない・一 時的な職	正規職員等 でない・一 時的な職	専修・外国 の学校等	左記以外	不明
美術	14.7%	53.8%	8.9%	1.6%	18.4%	2.6%
デザイン	3.7%	68.7%	7.7%	1.1%	16.6%	2.3%
音楽	15.5%	42.7%	17.8%	6.3%	15.2%	2.6%
その他	4.7%	64.7%	10.7%	1.9%	15.9%	2.0%

表2-4 資料出所：学校基本調査より筆者作成

3.3 芸術系大学の発表データから見る進路

芸術系大学が発表している就職率は「就職希望者に占める就職者の割合」であるため概ね90%以上と非常に高く学校基本調査の卒業後の進路調査とはかなり異なる。そこで、その差を埋める進路の状況を各大学が提示しているデータの見出しカテゴリーから読み取り、進路の全体像の把握を試みた。

データの見出しは大学によって異なるが、大きく分けて、「就職」「進学」「アルバイトや活動」「その他」とな

表5 大学が公表している進路先のカテゴリー

っている。それぞれの就職状況の出し方に、各大学の意図と専攻分野による特徴が見て取れる。見出しから読み取れる特徴としては、①「活動」「アルバイト」が進路の一つ（意図的に就職しない）と

A芸術大学（公立）美術学部／音楽学部
「民間」「教員」「公務員」「未定」「進学・留学」「芸術活動」「アルバイト」
B芸術大学（公立）美術学部／音楽学部
「活動（制作、演奏、音楽、研究）」「就職（企業、公務員、教員、自営、美術・音楽講師）」
「その他（アルバイト、その他）」「進学（修士、学部等、海外、専門学校等、その他）」「未定（就職希望、進学希望、留学希望、その他）」
C美術大学（私立）
「卒業者」「就職希望者」「就職」「進学」「その他（作家活動・アルバイト等を含む）」
D美術大学（私立）
「卒業者」「就職希望者」「就職」「進学」「作家希望」「その他」
E音楽大学（私立）
「音楽系企業・財団」「一般企業就職」「演奏関係」「学校教職員」「音楽教室講師」「進学・留学」「その他（進学・留学準備、オーディション準備、教員採用試験準備など）」
F音楽大学（私立）
「企業・公務員」「進学」「フリー」「教員」「音楽教室」「医療福祉」「ホームレッスン」「その他音楽関係」

なっている、②「教員」が就職の中でも別途取り上げられるケースが多い、という点である。

①のように「活動」「アルバイト」の世間一般で言う「非正規雇用」や「無職」が進路とみなされているのは、後の先行研究の中でも述べられているが、制作・演奏活動を継続するために就職をしない目的を持った非正規雇用であり一般的なフリーター、無職問題とは異なっていると考えられる。また②のように「教員」が取り上げられるのは教員は、安定

した職と収入を得ながら、大学教育で培ってきた学びを継続できる進路として、大学側も企業への就職とは別に特別に捉えている意図が見える。その他に、各大学の公表カテゴリーからは、大学によっては、多様な進路があるため業種をより細かく伝えて進路の可能性をきちんと社会に説明しようとしている姿勢が見られた。

4. 芸術系学生のキャリアに関する調査及び論文のレビュー

4.1 目的と背景

芸術系学生とキャリアに関する先行研究の、テーマ、課題、共通点を整理し、芸術学系学部特有の就職とキャリア教育の概要をまとめる。2010年代まで遡り「芸術系学生」「キャリア」「就職」といったキーワードを使用した論文や調査の一部を取り扱う。ここで取り扱う文献のみで、芸術系大学のキャリアについて全体像を捉え切るのは難しいが、課題、動向、研究の方向性など少なからぬ共通性を見出す。

4.2 文献・調査レビュー

最も散見された視点は、大学卒業後は遮断なく就職し、退職まで「正社員」として安定した職業生活を送るキャリアが「標準的キャリア」ⁱⁱⁱモデルであることと、「芸術」という専門的な知識と技術をもった芸大生のキャリアをどう捉えるか、という点である。

生駒(2010)では、芸術系学生に進学した学生の進路選択の過程に注目している。そこでは、芸大を目指す学生は、好きなことや得意なことを大学で学び、それを職業にする「直線的」な進路選択(キャリア)と思われているが、実際は、高校時代の進路選択時や就職活動時に、将来の生活を考える教師、家族の意向に対処する悩みと同時に、自身の技量を見極めるという厳しい選択の連続の中、進路感・職業観の変容を行っている。日本の「標準的キャリア」への移行が進路選択に及ぼす影響を浮き彫りにしている。

居郷(2012)は、こうした社会背景を踏まえ、A「芸術家」と長期安定雇用のB「正社員」、進路未定・無業のC「フリーター」を芸大生の主な進路として示し、その関係性で図式化している。卒業後の進路はAを理想としつつも、Bに誘導し卒業する動き(①)、収入は不安定であるがAを目指してCとして創作活動を続ける(②)、①の文脈で考えると好ましくないとされる②が対立項となっている(③)を表した。大学の就職支援としては①に誘導する事を理想としていたが、「就職支援活動」に係る3大学の教員、職員へのインタビューによる質的研究で、「フリーター」的な生き方・働き方が、これまでの活動継続の手段となっている意義を重要と捉えている。①と②は「対立」(③)ではなく、正社員に

iii 学校卒業後直ちに企業に就職し、同一企業に継続勤務しているとみなされる労働者を「標準労働者」という。そのため、そうしたキャリアを「標準的キャリア」としている。
独立行政法人労働政策研究・研修機構 <https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/qa/a02.html>

「誘導する」ことが可能性を見出していた。

眞鍋（2013）は、大学で実施されているキャリア教育は、「メンバーシップ型」雇用の労働市場を想定して実施されていることを指摘し、職業的な意義を持つ教育が行われている学部ではキャリア教育の意義が小さいという仮説に基づき、特定の職業に向けた知識と技術の教育がされている芸術系の大学におけるキャリア教育について考察している。3大学4名のヒアリング調査の結果から、専門教育（アート）と実社会をつなげるイメージを作ることがプロジェクトを通じて実施されている。キャリア科目が高等教育の中で定着しているが、芸術系大学では、「専門性を社会的な課題の解決に寄与することの気づき、実際に自身の専門性を獲得することと課題解決に向けてのチームでの活動を作り出すこと」がキャリア教育だとしている。一方で、専門性の高い教育が多くの企業が採用している「メンバーシップ型」雇用に結びつくことは多くない。日本の労働市場の問題だけでなく、大学のキャリア教育等の努力で変化させること、について課題を残している。

喜始（2014）は芸術系（美術）学生の就職率の低さに所以する芸術家／フリーランスの労働について、ある芸術家のインタビューを「場所」「資金」「発表機会」から紐解いている。芸術家が芸術活動を継続する上で、「場所」「資金」を確保するために、副業または芸術以外の労働が重要な意味を持つとしている。進路選択の「アルバイト」などが該当する。また、作家として「発表機会」を獲得していく基礎的・実践的教育の機会が大学で不足していた、ことが示唆されていた。続いて、喜始（2015）は、芸術系（美術）学生の就職率の低さのメカニズムの解明を試みている。就職は「制作の休止・趣味化」と考えられる風潮の中、制作の継続が就職の争点となる。制作継続のためのアルバイトや無職は、一般的なフリーター・無職問題とは異なる。また、大学院進学は、制作（研究）継続だけではなく、制作場所の確保という、より良い環境での活動継続を意味する。就職率の低さが、大学教育で培った制作継続にある点で、美大の教育体制は、学生に制作主義的思考、作家としてのアイデンティティ育成には成功している。しかし、「標準的なキャリア」モデルから外れてしまう非就職者の存在、作家アイデンティティの育成は、他の可能性や一括採用が主流の正社員就職の機会を制約する。また、作家活動継続のための具体的戦略、つまり「資金」「場所」「発表機会」などを検討する機会、個人起業家としての知識などがどこまで大学で学べているか、課題を残していた。

森田（2015）は、芸術学部新設にあたり産業界へニーズ調査を行い芸術学部におけるキャリア教育概念的枠組みの構築を試みている。その結果、芸術系学部にはジェネリックスキルに加え、発想力、表現力、他者とは異なるユニークな視点が求められていた。森田（2016）は、「就職活動」対「好きなこと、やりたいこと」という対立構造から抜けるための就職支援の視点として、①低学年からの外の世界と関わる機会の提供、②経済的自立の必要性認識を促す、③就職は「制作の休止・趣味化」ではなく、美術・工芸との新しい関わり方のスタート、と伝える3点をあげている。就職支援の取り組みにより、就職をネガ

ティブなものからポジティブなものへ考えさせる視点を明らかにしているが、学生が教育で獲得してきた能力には注目しておらず、それらと社会を結びつける方法について検討する必要があるだろう。

宮永他(2017)は、芸術系大学におけるキャリア教育では、「段階的なキャリア教育科目の開講、卒業生の紹介等での職業観の育成、プロジェクトによる実践的かつ専門性と連動するキャリア教育、就職支援、作家・企業等支援などの進路別でのキャリア支援」が実施されていることを調査で明らかにした。

4.3 文献レビューのまとめ

これら文献は、目的、対象など様々でインタビュー数も限定的なため、確固たる特徴、共通点を見出すことは困難だが、若干見えてきた課題と背景をまとめる。芸術系学生の就職や進路選択には、常に日本特有の「標準的キャリア」や「メンバーシップ型雇用」の問題が存在する。それらは同じものに捉えられがちだが、「標準的キャリア」は、卒業後遮断なく就職して同じ企業で働く「安定」に対し、芸大生の芸術活動の継続は、その可能性を奪い兼ねないので、進路選択に影響を及ぼしている。「メンバーシップ型雇用」は、やりたい事を専門的に職業にすることと相反する。技術や才能により成立する「芸術家」と「就職」との間に意図的な「フリーター、アルバイト」が存在する。しかし、「標準的キャリア」＝「安定した生活」という構図に対し、非正規雇用が社会にもたらす問題及び保護者の要請など複雑に絡み合い、「就職」へと導く大学のキャリア教育や支援が求められていた。

しかし、技術の進歩、労働力不足、人生100年時代など、社会の変化はこれまでの「標準的キャリア」の終身雇用、年功序列から副業を推進する「パラレル・キャリア」や専門的な人材を求める「ジョブ型雇用」など多様な形態に変わりつつある。専門的な教育から職業的アイデンティティの育成ができていない芸術大学にとってはメリットになり得る変化だが、そうした働き方を専門的に教えるキャリアスタッフの不足やキャリア教育で起業や実務に関する知識を十分に教えられていない可能性が見られた。芸術系学生の身に付けたスキルについては、汎用的なもの、社会人に必要とされているものがあげられていたが、一部の大学内の調査であるケースが多く、確固たる証拠として社会に共有するまでの説得力は十分ではない。また教育で培ったスキルがどのように活かすことができるか、大学が十分に把握し社会に説明できる状況にするための具体的な方法などは議論されていなかった。

5. 海外の研究事例—イギリス—

5.1 目的

本項では、イギリスで実施された“Occupations and skills of Arts, Humanities and Social

Sciences Graduates and Postgraduates (芸術・人文・社会科学系の卒業・修了者の職業とスキル)” (Lyonette et al, 2017) を取り上げ、レポートの構成、調査方法、発見された課題の大まかな概要を紹介する。そして、日本で行われている研究と議論の内容を比較し、今後のキャリア教育、研究及び調査の参考となる知見を見出すことを目的とする。

5.2 レポートの背景と概要

本報告書は、英国学士院が実施している“Flagship Skills Project” (AHSSを学ぶことで得られるスキル、個人にとっての価値、社会に貢献していること、将来的に貢献できることを初めて明確にすることを目的としたプロジェクト) (The British Academy, 2017) のためにウォーウィック大学 (Warwick University Institute for Employment Research, 以下 IER) でまとめられたもので、AHSSの学生が得られるスキルを明確にして社会に共有する取り組みである。イギリスは1992年継続教育・高等教育法により高等専門学校が大学に昇格して、高等教育市場が拡大した。その結果大学進学率は高くなり、大学教育と労働市場の関係が増している。また、大学進学者の増加により、高等教育の授業料は無償から有償になった。授業料は年々上昇し、現在は上限£9250となり、学習者は教育ローンを利用して大学に入学し、就職後返還する制度が定着している (文部科学省, 2018)。こうした背景から、保護者や学生は、学位取得によって得られるスキルとその後の生活に関心が高まり、大学は学生と社会との接続に責任を負い、学生の学びが個人の職業人としての将来にいかに関与されるか、またイギリスの社会経済に貢献するかを明らかにする必要がある。

レポートの主な項目は、

1. 文献レビュー
2. 方法論の説明
3. 学部生及び大学院生 (課程コース) の定量的及び定性的データ
4. 大学院生 (研究コース、学位取得者) の定量的及び定性的データ
5. まとめ

となっている。今回使用したテキストの翻訳は筆者が行い、直訳ではなく意図を捉えて簡素化している。本レポート「skill (スキル)」は、技術・技能ではなく、教育や経験を通じて得られる個人が保有する総合的な能力として使われている。訳では「スキル」と表す。調査で使用されている学問領域は、JACS (Joint Academic Coding System) に準拠した科目ごとにグループ化されており、Arts (芸術) に該当するグループはCreative Arts and Design (CAD) とされ、さらに以下の学問領域に分類されている。

Creative Arts and Design (CAD) : クリエイティブアートとデザイン

- Fine Arts (美術)
- Creative (クリエイティブ)

- Design (デザイン), Product Design (プロダクトデザイン)
- Craft (工芸)
- Music (音楽)

文献レビューでは、2000年代初頭まで遡り多くの文献を取り上げ、(1) 卒業生のスキル、(2) 雇用者と学識者による卒業生のスキルと必要なスキルの評価、(3) 継続学習とスキル開発、(4) 将来必要なスキル、(5) AHSSの就職実態、(6) AHSSの経済と社会への影響、という観点からAHSSの特徴を捉える試みをしている。定量的調査では、イギリスの高等教育統計局 (Higher Education Statistics Agency, 以下HESA) が全卒業生に対して実施している“Destinations of Leavers from Higher Education (高等教育卒業生調査、以下DLHE)”及び“Longitudinal Destinations of Leavers from Higher Education (縦断的高等教育卒業生調査、以下LDLHE)、並びに”Futuretrack”(IER)の調査を取り上げて、大規模かつ縦断的なデータから分析を試みている。各調査の詳述は本稿の目的ではないため省略するが、簡単に説明すると、DLHEは全卒業生を対象とした卒業6ヶ月後の状況調査であるのに対し、LDLHEはDLHEのフォローアップ調査でDLHE回答者からサンプルを抜き出し3.5年後の状況を調査している。Futuretrackは、大学入学申請時から卒業後まで同じ集団を対象として1から4ステージの縦断的なサンプル調査である。定性的調査では、卒業生と雇用者のサンプル調査を行なっている。卒業生調査は22名に対しオンラインで90分間の構造インタビューが行われた。雇用者へのインタビューは、定量的なデータから得られる直接的な証拠が少ないため、教育、広告、ゲーム開発、ファッション、デジタルコンサルタント、研究関係の業種から6名に実施している。これら定性的調査は、サンプル数は少ないが、文献レビューや定量的調査を補完する意味で重要な役割を果たしていた。

5.3 報告書の成果と日本の研究、調査との比較

本レポートは包括的な文献レビュー、大規模調査の概要及び卒業生と雇用者のインタビューの結果を提供しAHSS学生のスキルと雇用について明らかにする試みである。また、調査の中で適宜STEMとの比較を用いて、より具体的にAHSSの特徴を引き出していた。芸術系と言っても分野は様々であるが、文献レビュー及び卒業生の調査においても「コミュニケーション能力、対人スキル」の高さを評価していた。いくつかの項目で、日本で行われている研究が提示した証拠と共通するスキル、就職傾向が見られた一方で、本報告書を読み解くことで、将来日本にも必要となる視点、研究の検討を得られることができた。詳細なレポートの成果を紹介し日本の調査と比較することは今回の目的ではないため省略するが、①日本より文献数が多く、②大規模調査が卒業後6ヶ月と3.5年後と縦断的に行われていて、その結果を学問分野で抽出して検討していること、がこの報告書の確かな証拠の提示と信頼性を高めている。また、芸術系学生のスキルと欠けているスキルを提示し

たのみならず、社会の変化を予測し将来必要となるスキル、生涯学習の意欲、ポートフォリオ・キャリアなど多様な働き方に必要な新たなスキルの可能性も提示している。これらの知見から、類似点と課題について特筆すべき点のみ抜粋し、以下のようにまとめる。

- ① 大学教育から得られたスキルに、問題解決能力、時間管理、優先順位、クリエイティブで革新的な視点、自立して業務を進める、チームで協力して働く、プレゼンテーションスキルなどがある。音楽の学生は、特に厳しい経験から得られたフラストレーション・マネジメント能力がある。
- ② 企業との連携事業は、時間管理、製品への責任など実践的なスキルの要請に役立っている。
- ③ “デザイン・リテラシー”、“美を鑑賞する能力”がクリエイティブではない職場でも活用できる。
- ④ 起業やポートフォリオ・キャリア（ポートフォリオ・ワーカー）^{iv}（美術、音楽に多い）のためのビジネススキルは大学で学ぶ機会が不十分である。
- ⑤ デジタルな技術がクリエイティブな業種のみならず幅広い業種で必要となる。
- ⑥ 卒業後は多様な職種についているが、新卒後職業に就くまで他専攻より時間がかかる。
- ⑦ ある調査はクリエイティブな業務を、「専門型：クリエイティブ産業で、クリエイティブな職に就く場合」、「補助型：クリエイティブ産業だが、非クリエイティブな職種に就く」、「組み込まれ型：クリエイティブ産業以外でクリエイティブな業務を担当」と分類し、芸術系学生は「組み込まれ型」に就職する割合も高く“柔軟性”を示している。
- ⑧ 教職は、学位に関連した活動を継続するための安定的な職と給与の資源となっている。
- ⑨ 芸術家はその働き方や生涯学習者であることなど労働市場に「革新」をもたらしている。
- ⑩ 美術や音楽の分野ではポートフォリオ・キャリアの割合が増加している。

5.4 まとめ

いくつかの項目で、日本で行われている研究が提示した証拠と共通するスキル、就職傾向が見られた。①の音楽の特徴は、大内が著書で「音大生の武器」として紹介している(2015)。しかし、日本では、明確なスキルと③のように雇用との関係を明らかにする視点

iv portfolio career or portfolio worker:

portfolio career: working life in which you have several different jobs at one time, or a series of different kinds of job（一度にいくつかの異なる仕事をする、または異なる種類の仕事を連続して行うキャリア）

portfolio worker: a professional person who works for many different companies or individuals（様々な企業や個人のために働くプロフェッショナルな人）, ロングマンビジネス辞典、<https://www.ldoceonline.com/jp/dictionary/portfolio-career>

は欠けている。④、⑤、⑨、⑩のように、社会の変化に対応した働き方、スキルアップが考えられ、そのために大学ができることを考えていく必要性を明確にしていた。②は日本における産学連携の意義を再確認しつつ、⑦のように多様な職種でクリエイティブなスキルが活かせる事を、同時に社会に共有していく意味を示唆している。

詳細な読み込みと分野による比較をすることで、更なる共通点と課題が見つかると考えられる。イギリスにおけるポートフォリオ・キャリアへの言及、クリエイティブな職種が多様な業務で必要となりつつある示唆が見受けられ、こうした動向は、今後日本の労働市場の変化に対応する上で、芸術系大学がいち早く注目して取り組むべき内容だと分析する。芸術系学生が、これからの労働市場の主要な担い手となる可能性を示唆していた。また、今回は、調査方法に注目していたが、このレポートをスキル、雇用者の意見、将来のスキル、といった調査のアウトカムに注目して整理する必要もあるだろう。各分野別の詳細なレポートの報告は、十分に内容の精査ができていないため、次回の課題としたい。日本で同様な調査をする必要性ではなく、このような海外の調査事例を精査し、そこから知見を得て、日本の事情と比較することの意義を感じた。

6. 今後の課題

本稿では、データから芸術系大学の卒業生の進路動向を確認し、先行研究によってデータが示す意味を捉え、また大学教育やキャリア支援の取り組みと課題を明らかにすることを試みた。更に、イギリスのレポートを参考とし、共通点と相違点、そこから見出される今後の課題を探った。その結果、芸術系大学の就職率の低さは専攻特有の意味があるが、それは大学が専門的な教育を実施し、職業観を育成できているのとは裏腹に、日本の「標準的なキャリア」の圧力は進路選択に影響を及ぼしていることを表していた。また、先行研究では、就職しないことが否定的に捉えられがちなトーンも散見された。一方で、大学教育で得られたスキルと雇用との関係を明確に打ち出すことはできておらず、改めて「身につけたもの」を可視化し共有することは今後取り組むべき課題だろう。また、社会の変化がもたらす職業の変化、労働市場の変化をいち早く予測し、パラレル又はポートフォリオ・キャリアや起業に必要なスキルをとりいれたキャリア教育が求められるのではないか。イギリスのレポートより詳細な精査は十分にできなかったが、そこから得られた知見は今後の芸術系学部を決して否定的なものではなかった。更に詳細に内容を精査し、芸術系学部の魅力を大学関係者が再認識し社会に発信するための方法を探っていきたい。

<引用・参考文献>

- The Guardia (2020a) 7月30日. The future of education or just hype? The rise of Minerva, the world's most selective university. (<https://www.theguardian.com/education/2020/jul/30/the-future-of-education-or-just-hype-the-rise-of-minerva-the-worlds-most-selective-university>) (2021年1月5日閲覧)
- The Guardian (2020b) 9月10日. 'Humanities graduates are just as employable': do the sciences really lead to more jobs?. (<https://www.theguardian.com/education/2020/sep/10/humanities-graduates-are-just-as-employable-do-the-sciences-really-lead-to-more-jobs>) (2021年1月5日閲覧)
- The British Academy (2020) Qualified for the Future: quantifying demand for arts, humanities and social science skills. (<https://www.thebritishacademy.ac.uk/publications/skills-qualified-future-quantifying-demand-arts-humanities-social-science/>) (2021年1月5日閲覧)
- Lyonette, Clare et al.(2017). Occupations and skills of Arts, Humanities and Social Sciences Graduates and Postgraduates. Warwick Institute for Employment Research University of Warwick. U.K. (<https://www.thebritishacademy.ac.uk/documents/2549/Flagship-Skills-AHSS-graduate-employment-outcomes.pdf>) (2020年12月24日閲覧)
- The British Academy, Flagship Skills. (<https://www.thebritishacademy.ac.uk/projects/flagship-skills/>) (2021年3月1日閲覧)
- UK Higher Education Statistics Agency. About HESA. (<https://www.hesa.ac.uk/about>). (2021年3月7日閲覧)
- Warwick University Institute for Employment Research. What is Futuretrack. (<https://warwick.ac.uk/fac/soc/ier/futuretrack/>) (2021年3月10日閲覧)
- 相澤真一 (2018)「職業芸術家はいかに専門職技能を身につけるかー海外在住芸術家のキャリア形成の社会的分析ー」『中京大学現代社会学部紀要』12-1, pp.183-224.
- 生駒俊樹 (2010)「キャリアデザイン形成過程の研究ー芸術系大学生進路選択」『キャリアデザイン研究』16, pp.103-112.
- 居郷至伸 (2012)「芸術系大学の就職支援を読み解く：就労をめぐる語りに着目して」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』64, pp.322-323.
- 大内孝夫 (2015)『「音大卒」は武器になる』株式会社ヤマハミュージックメディア.
- 喜始照宣 (2014)「芸術系大学出身者と労働」『日本労働研究雑誌』645, pp.50-53.
- (2015)「美術系大学からの卒業後進路選択-作家志望に着目して」『高等教育研究』18, pp.191-211.
- 新谷 康浩 (2016)「職業地位達成の問題構成ー芸術系・人文系のキャリア教育に着目してー」『教育デザイン研究』7, pp.33-42.

- 眞鍋倫子 (2013)「大学教育とキャリアをつなげること：芸術系の大学へのヒアリングから」『教育学論集』 55, pp.153-170.
- 森田佐知子 (2015)「産業界ニーズから見た芸術系学部におけるキャリア教育の在り方」『佐賀大学全学教育機構紀要』 3, pp.125-136.
- (2016)「芸術系学部の学生に対する有効な就職支援について－美術・工芸に対する意識の変化に着目した探索的研究－」『佐賀大学全学教育機構紀要』 4, pp.153-163.
- 宮永春香他 (2017)「工芸科におけるキャリア教育研究について」『金沢美術工芸大学紀要』 61, pp.55-66.
- 文部科学省 (2015-2020)「卒業後の状況調査」『学校基本調査』.
- 一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ 合同調査 (2019)「高校生と保護者の進路に関する意識調査 2019」リクルート進学総研.
- 愛知県立芸術大学「卒業生・修了生の進路」(<https://www.aichi-fam-u.ac.jp/guide/guide01/guide01-07.html>) (最終閲覧日:2021年3月10日).
- 京都市立芸術大学「進路・就職状況」(<https://www.kcua.ac.jp/course/job/>) (2021年3月10日閲覧)
- 多摩美術大学「2019年度卒業生数と進路」(https://www.tamabi.ac.jp/prof/disclosure/resources/adm-statistic-2_2019.pdf) (2021年3月10日閲覧)
- 武蔵野美大学「進路・就職」(<https://www.musabi.ac.jp/wpcontent/uploads/2020/09/2019shinrosyukei.pdf>) (2021年3月10日閲覧)
- 武蔵野音楽大学「進路状況」(<http://www.musashino-music.ac.jp/campuslife/support/course/course/>) (2021年3月10日) 閲覧
- 名古屋音楽大学「進路情報」(<https://www.meion.ac.jp/guidance/after-graduate/>) (2021年3月10日閲覧)